

授業改善に関する研究（中間報告）

－子供理解と授業づくりを通して－

子供たちに「生きる力」をはぐくむことを目指し、自ら学び、自ら考える力の育成と基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るためには、よりよい授業の在り方を常に問い続けなくてはならない。本研究では、「子供たちが主体となる学習」をキーワードに、かかわり合いを単元構想に位置付け、探究的な学習が展開できる単元構想の在り方、子供の見取りを基にした授業分析等の実践例を示し、教科の特性や発達段階をとらえた授業改善の在り方について研究する。

<検索用キーワード> 小・中学校 授業改善 授業分析 かかわり合い 単元構想
座席表 子供の見取り 子供理解

研究会委員

北名古屋市立鴨田小学校教諭	今田 靖嗣(平成 17, 18 年度)
常滑市立大野小学校教諭	岩田 久徳(平成 17, 18 年度)
豊田市立大林小学校教諭	橋本真紀子(平成 17, 18 年度)
弥富町立弥富中学校教諭	高木 淳(平成 17 年度)
碧南市立東中学校教諭	三宅 光紀(平成 17, 18 年度)
豊川市立南部中学校教諭	城所 匡(平成 17, 18 年度)
総合教育センター経営研究室長(現西尾市立室場小学校長)	岩崎 義高(平成 17 年度主務者)
総合教育センター研究指導主事	吉原 文子(平成 17, 18 年度)
総合教育センター研究指導主事	清水 範彦(平成 17, 18 年度)
総合教育センター研究指導主事	野田紀世子(平成 17 年度)
総合教育センター研究指導主事	竹本 正子(平成 18 年度)
総合教育センター研究指導主事	浅井 英雄(平成 17 年度)
総合教育センター研究指導主事	河合 康博(平成 17, 18 年度)
総合教育センター研究指導主事	村越 英昭(平成 17, 18 年度)
総合教育センター研究指導主事	山口 明則(平成 17, 18 年度)
総合教育センター経営研究室長	横田 佳昭(平成 18 年度主務者)

研究会顧問

愛知教育大学助教授 久野 弘幸(平成 17, 18 年度)

1 はじめに

平成 17 年 10 月に中央教育審議会より「新しい時代の義務教育を創造する」という答申が出された。この答申の「新しい義務教育の姿」の中では、「子供たちがよく学びよく遊び、心身ともに健やかに育つこと」「質の高い教師が教える学校」「生き生きと活気にあふれる学校」等の実現を求めている。また、学校の教育力、すなわち「学校力」を強化し、それを通じて、子供たちの「人間力」を豊かに育て

ることが改革の目標であるとも論じられている。

平成18年2月には、中央教育審議会教育課程部会より審議経過が報告されたが、その骨子は、これまでと同様に「生きる力」をはぐくむことを目指し、その力の構成要素である「確かな学力」や「豊かな心」、「健やかな体」の育成の重要性が再確認されるものであった。また、この報告書の中には、「言葉や体験などの学習や生活の基盤づくりの重視」や「習得型学習と探究型学習の統合化」、「教育活動全体を通しての国語力の育成」といった「確かな学力」をはぐくむためのキーワード的内容が盛り込まれている。

現行の学習指導要領では、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」の育成が求められている。また、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」などが挙げられている。

こうした中、教員の授業力や指導力の向上を目指した研修会や取組が積極的に行われたり、P D C Aサイクルを基本とした学校経営や授業改善の在り方が提案されたりしている。そこで、授業に対する教師の営みを振り返ってみると、子供をとらえ（Research）、授業を設計し（Plan）、授業を実施し（Do）、授業実施後に分析・評価（Check）をし、それを基に改善策（Action）を打ち出すという一連の流れが構成されるべきものとする。

こうしたR-P D C Aといった一連の流れを、教師自身が日常的な営みとして位置付け、謙虚に自己の授業の在り方を振り返り、子供にとってよりよい授業である「分かる・楽しい」授業の具現化に努めなければならないと考える。

2 研究の目的

よりよい授業を成立させるためには、どのような視点から授業や子供をとらえ、学習を組み立て、実践・分析し、どのように改善を図ることが適切であるかを見極めることが重要である。

本研究では、教師の授業力を向上させるためには、子供を見取る力と客観的に授業を分析する力、この二つが欠くことのできない力であると考えた。そこで、「主体的な学習」と「かかわり合い」をキーワードにした授業づくり（単元構想）と、子供の変容の分析の2点から授業改善の在り方を探り、授業の質的向上を目指した実践的な研究に取り組むことにした。

授業実践では、子供の背後にいる教師のどのような考え方や営みが、かかわりやかかわり合いを強めたり、深めたりすることに有効に働き、子供の主体的な学習を成立させる要件となるかを明らかにする。

3 研究の方法及び仮説

本研究では、かかわりとかかわり合いを次のように定義し、目指す授業展開の基本的な在り方を、次の3点とした。

かかわりとかかわり合い

- かかわりとは、「ひと・もの・こと」に対しての一方向の働き掛け
- かかわり合いとは、言葉を使った集団学びの場であり、双方向の情報・意見交換により、課題や問題等が解決されたり、新たな考えや方法等が導き出されたりする思考深化の場

授業研究の対象を小学校3教科（国語・理科・図画工作）及び中学校2教科（社会・数学）とし、

子供が主体的にかかわり合える授業を構想するため、研究協力委員及び所員との共同研究を行う。授業実践では、目指す授業展開を基に、単元構想や手だて等の検討を加え、授業実施後の記録等の分析を行い、授業改善に生かす。また、大学の先生を顧問に据え、より専門的見地からの指導をいただく中で研究の推進を図る。

本研究が言語表現を中心にしたかかわり合いの授業に焦点を当てた理由は、子供たちが各課題に対して、今もっている力を十分に活用して、本気で・本音で語り合う学習の場を積むことにより、他者の考えや意見を真摯に受け止

－ 目指す授業展開の基本的な在り方－

- ① 子供の主体的な学びが保障される授業展開
- ② 子供が仲間とかかわり合える授業展開
- ③ 基礎的・基本的な内容が確実に定着する授業展開

め、その存在までも再認識することができると思ったからである。かかわり合いの学習場面において、子供たちが主体となって仲間と意見や考えをぶつけ合い、問題や課題を解決できる分かる授業・楽しい授業を目指しているのである。

このような子供が主体となるかかわり合いのある学習の価値を洗い出してみると、次のような学びや育ちの場となる。

- ・子供の個性を引き出し、伸ばす場
- ・集団の中で、自らの考えを他者と切磋琢磨する場
- ・他者の考えや意見を真摯に受け止める場
- ・仲間の存在に新たな価値を見いだす場
- ・新たな課題解決の道筋や方法等が習得できる場
- ・子供の課題が明確になったり、解決されたりする場

こうした子供たちが本気で、本音で語り合う学習の場であるかかわり合いを教師が意図的に仕組むことで、子供たちは主体的に考えを述べ合い、集団学習や集団思考の大切さを実感していく。このかかわり合いの場では、子供たちの課題が解決されるばかりではなく、新たな課題解決の道筋や方法等も習得できる。そして、

人とかかわり合える力やコミュニケーション能力の育成、集団生活者としての豊かな人間関係も形成されると考える。

そこで、次のような研究仮説を設定し、授業改善に取り組んだ。

－ 研究 仮 説 －

子供に自分の考えや追究方法をもたせ、教師が意図的なかかわり合いを仕組むことで、子供は主体的に考えを述べ合い、その中で共に学ぶ意義を見だし、意欲的な追究をするだろう。

4 研究の内容

(1) 17年度の取組

研究一年次は、授業の出発点となる子供の見取り、つまり子供の主体的な学習を促すための前提となる子供のとらえを行ってきた。この見取りを基に、教師は、子供のよさをとらえ、学習を通して育ってほしい姿や身に付けてほしい力を明確にしてきた。こうした見取りで大切なことは、教師が目の前の子供に対して、先入観をもたず、子供のありのままをとらえたり、累積された見取りをつないでとらえ直したりすることである。

子供の見取りは、日ごろの生活や学習場面の姿の集積であり、次のようなとらえる場を考え、とらえる手だてを講じた。

○とらえる場

・教師に見える部分

授業での表情や発言・行動，行事，給食，遊び，清掃，部活動，朝・帰りの会 等

・教師に見えにくい部分

家族とのかかわり，家庭・地域での様子 等

○とらえる手だて

学習記録，日記・作文，観察，子供との対話，家族や前担任からの聞き取り 等

この見取りを基に、授業立案の段階では、学習指導要領の目標、内容との関連を図りながら、学習内容を精選した。そこでは、身に付けさせたい力を明確にし、各教科の年間指導計画や評価規準、指導と評価の計画等を作成した。

また、教材性の吟味に当たっては、次の点に留意した。そして、単元導入時には、教材との出会わせを工夫し、実感を伴った気づきもてる単元構想を考え、授業実践に取り組んだ。

－ 教材性の吟味 －

- ・願う子供の姿を具現することが可能か
- ・日常生活や既習内容と関連し、子供の興味・関心を喚起するか
- ・子供の個性的な追究活動が複線型となるか
- ・追究活動が継続し、新たな課題が連続的に発生するか
- ・適度な困難さ（教育的価値）があり、学習後には達成感・充実感が得られるか

授業研究においては、授業記録を分析し、教師のしゃべり方の癖や出るタイミング、切り返した内容などを振り返るとともに、手だてや支援の有効性等を検証し、これまでの指導方法を見直す努力を重ねてきた。また、子供の学びを座席表に記入し、授業で活用するとともに、子供の変容をとらせる手だてとした。

こうした一年次の取組から、「子供の興味・関心が高まり、主体的な学習が展開される単元構想の在り方」や「かかわり合い場面における子供のコミュニケーション能力の育成と充実」、さらに「抽出児の変容分析の不十分さ」等の課題が浮かび上がってきた。

(2) 18年度の取組

18年度の中心的な取組は、教科におけるかかわり合いの基本的な考えを明らかにし、その出現が想定できる単元構想を立案することである。そして、授業実践とその分析を通して、子供の主体的な学習が保障される授業展開であったかを考察する。こうした単元を構想する力や授業を分析する力は、日々の授業において適切な対応のできる「確かな授業力」につながり、子供の意欲、理解の状況及びその変容等を見取る力の向上につながるものである。また、今後の授業改善の視点やかかわり合いのある「分かる・楽しい」授業構成の在り方を明らかにすることにもつながると考え、次のように授業改善の方針と研究内容を設定した。

－ 18年度の授業改善の基本的な考えと研究内容 －

子供の見取りと授業分析を生かし、かかわり合いの中で学ぶことの楽しさ・喜びを味わう子供の具現化を図る。

- (1) 子供の見取りを単元構想に生かし、子供たちが主体となり「自ら学びたい、解き明かしたい」などと思えるような単元構想の在り方
- (2) 課題解決の過程で得た結論や調査・観察活動等で得た知識等をかかわらせることで、「分かった、なるほど」などと思える思考に深みを増すことができるかかわり合い（集団学び）の仕組み方。

実践に当たっては、できる限り子供の追究の道筋を見通し、教師の支援の在り方を明確にするよう努めてきた。これまでの2年間を振り返り、子供が主体となる単元を構想するときの留意点を整理したところ、次の7点に集約された。

－ 単元構想上の留意点 －

- ① 一人学び（一人調べ）の時間を保障する
- ② 追究活動を強める支援や手だてを明確に位置付ける
- ③ 学びの状況を予測・見通して、子供の気付きや考えを分類・整理し、ずれや対立点を明示する
- ④ 追究状況をとらえ、かかわり合いのタイミングを計画する
- ⑤ 「教えること」と「考えさせること」を区別する
- ⑥ 「教科書中心」から、子供の学びである「追究状況・追究内容中心」の考えに転換する
- ⑦ 子供の追究状況により、構想を柔軟に見直し、変更していく

5 研究のまとめと課題

かかわり合える集団の育成には、日々の営みにおいて、教師の共感的・受容的な態度や信頼関係のある学級経営が不可欠であることは言うまでもない。また、「話す・聞く」、「書く」ことの習慣化と子供の見取りを、日々の営みの中で計画的・意図的に積み上げていかななくては、かかわり合いに深みが生まれない。

かかわり合いの場が生きるためには、子供たちを日常的に「話す・聞く」という学習に慣れさせ、学級が学習集団であるという意識を醸成していかななくてはならない。そのため、日常的に子供たちの「話す・聞く」という力をはぐくむ視点を、整理すると次の8点にまとめることができる。

－ 日常的に話す・聞く力をはぐくむ視点 －

- ・ 思いを込めて語る
- ・ 考えの根拠をはっきりさせながら語る
- ・ 経験や既存の知識とつないで語る
- ・ 仲間の発言に共感したり、反発したりしながら語る
- ・ 具体的な活動・物を取り入れたり、動作化したりしながら語る
- ・ 相手の目を見ながら聞く
- ・ うなずいたり、首をかしげたりしながら聞く
- ・ 話し手の意図を考え、メモをとりながら聞く

また、教師の支援の基本は、「うなずく・褒める・繰り返す」であるが、子供たちが主体となって学習を深めるためには、次の7点に留意する必要がある。

本研究では、こうした基本的な考えを共通理解し、各教科で構想を練り、子供が主体

となるような単元構想や思考が深まるかかわり合いの具現化を目指して実践に取り組んできた。しかし、言語表現を基にしたかかわり合いの重要性は理解できても、教師が意図的に仕組んだかかわり合い時の子供の思考の深まりや手だてとの関連性等の分析が不十分であった。また、これらの分析が教師側のものであったため、子供の側から見たかかわり合いの授業の評価の在り方についても考えてみる必要がある。

6 おわりに

研究二年次は、子供の見取りと授業分析力を生かし、「子供が主体となる単元構想」と「かかわり合い」を中心に授業改善に努めてきた。その結果、授業を組み立てる際の留意点やかかわり合いの価値等を明らかにすることはできた。

しかし、授業という一瞬の場面を直視すると、目の前の子供の反応や発言から、学習内容の定着度や理解度を瞬時に見取り、子供の学習状況に応じた授業改善を即座に行わなくてはならないのが現実である。こうした確かな授業力が求められているわけであるが、教育技術として確立することは困難であるように思う。

研究三年次も、基本となる授業サイクルをR-P-D-C-Aとし、子供の学習の深化・発展にとって、より効果的で即効性のある指導と評価の一体化の在り方について研究を進めたい。

－ かかわり合いにおける教師支援の留意事項 －

- ・ 第一発言者の選定、登場のさせ方を決める
- ・ 第一発言者にかかわる子の登場のさせ方・タイミングを考える
- ・ 考えを語り切らせる
- ・ 揺さぶりをかける
- ・ つぶやきをとらえる
- ・ 子供相互のかかわりをとらえ、考えやずれ、違いを明確にする
- ・ 具体的な活動に戻す